

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学(2)』第6講

一九八二年二月二十四日②「真実を語ること」他

2025年12月2日

M せんせい

■ アスケーシスとの関係における徳

- ・ マテーシスの観点: 自己への回帰と世界についての知の関係
 - ・ アスケーシスの観点: 自己への立ち返りの操作的な実践
 - 「自己の自己に対する訓練としての修練」
- 徳の獲得には、①観照的な知(マテーシスに対応)、②実践的な知(アスケーシスに対応)が必要
→ 「実践的な知」の獲得のためには、苦勞、熱意、訓練が必要

■ 自己の自己に対する実践の根本原理 (p362, l4-)

- ・ アスケーシスが成立し、さまざまな技法を展開するのは、法や掟のような審級に基づいていない
 - 修練は主体を掟に従属させる手段のひとつではない
 - 主体を真理に結びつけるひとつの方法
- ⇒ 私たちがなじんでしまっている思考では想定しにくい発想である
- たとえば、主体と認識の関係の問題(マテーシス)
 - 主体の対象化＝客観化は可能か、と考えてしまいがち
 - 世界についての知の方向を変えることによって、それが主体や主体の経験や主体の救済によって、なんらかの靈的な形式や価値を持つようにすること(主体を靈的に様態化すること)
 - アスケーシスの場合
 - ごく自発的に、「主体はどの点において、どの程度に、どのような根拠に基づいて、どのような限界の中で法に従うべきなのか」という問いを立ててしまう
:「法の次元への主体の従属」
 - 真を認識し、語り、実践し、行使することは、主体がしかるべく行動するばかりではなく、あるべきようにあり、あろうとするようにあることを、どの程度可能にするのか
:「それ自体で究極の目的である主体の構成、真理の訓練を通した、真理の訓練による主体の構成」
 - ・ 今日の私たちの主体性の装置は、主体の主体自身による認識という問題、主体の法への従属という問題に支配されてしまっている。
 - ・ 上記のいずれも、古代の思想や文化においては根本的ではなく、存在すらしていなかった。
マテーシスとは「知の靈性」、アスケーシスは「真理の実践と行使」でしかなかった
- ### ■ アスケーシスの目標と手段 (p364, l18-)
- ・ 「禁欲」という言葉から、放棄をすすめていき、ついには自己放棄という本質的な放棄へと至るような実践を連想してしまいがち。(※ アスケーシスとは、一般的に「禁欲」と訳される語らしい)

- ・ 古代の修練(アスケーシス)は全く異なる意味を持つ
 - ① 修練の最終的な目標は、自己放棄に到達することではなく、自分自身を構成すること
 - 完全無欠で申し分なく、自己充足しているような、自己と自己とのある種の間接関係を形成することであり、それによって自己の変形を生み出すことこそが、自分自身から汲み取ることのできる幸福
 - ② 私たち自身の一要素、構成要素や、私たちが所有する要素を放棄するのではなく、所有していない何かを身につけなければならない
 - 自己を保護し、自己に到達することを可能にしてくれるような何かを身につけなければならない
- 修練の到達目標は完璧な自己と自己との関係の構成であり、その機能ないしは策略や道具は、パラスケウエーの構成に他ならない
 - パラスケウエー:人生の出来事にたいして個人が準備することであり、それは開かれていると同時に合目的的なもの
- 修練とは、
 - ・ 個人を未来にたいして準備させること
 - ・ 起きるかもしれないことに適合するための準備やパラスケウエーを見出すこと

■ パラスケウエーの定義 (p366, l10-)

- ・ 犬儒派・デメトリオスは、<生存において知恵に至ろうとする者>と<格闘技の選手>を比較する
 - よき格闘家
 - ・ すべての可能な運動の訓練をすることでも、他者を越えることでも自分自身を越えることでもない
 - ・ 必要なのは起きるかもしれないことよりも強くなること、あるいはそれよりも弱くならないこと
 - いくつかの基本的な運動をきたえる
 - ⇒ どんな状況にも適応するのに十分な一般性と有効性を持ち、——それが十分に単純で十分に身についてさえいれば——必要なときにすぐに使えるようなものであればよい
- ・ パラスケウエーは、必要十分な運動、必要十分な実践の総体であり、それが私たちに人生を通じて起こりうることをすべてよりも強くしてくれる
- ・ アウレリウス、セネカ、エピクテトスにも同様の言及がみられる。

生きていく術は、思わぬ攻撃に対して備えを持ち、倒れずしっかり立っているという点で、舞踏よりも格闘技に似ている(アウレリウス)
--

- 舞踏家:ある種の理想に到達しようと最善を尽くし、他人と自分自身を凌駕しようとし、その仕事には限界がない
- 格闘技の選手:備えを持ち、しっかり立ったままであることが重要

- キリスト教的格闘家は、聖性に至る際限のない進歩の道の途上にいて、聖性において自己を放棄するほどまでに自己を凌駕する・敵や相手を持ち、自分自身に対する備えをしていなければならない(罪、堕落した本性、悪魔の誘惑などに立ち向かう)

→ 古代の格闘家は、**出来事との格闘家**で、キリスト教的格闘家は自分自身と格闘する

■ 備え(パラスケウエー)は何によって成立されるか (p368, l3-)

➤ 備えは、ロゴイ logoi(論理、言説、談話)によって構成される

- たんに真であるような命題や原理や公理を身につけることだけを考えてはならない
- 十分なパラスケウエーを身につけている優れた格闘家とは、何かを「頭の中に」打ち込んだ人、あるいは植え付けた人

→ 何を？

- ・ 実際に発せられた文、実際に聞かれたり読まれたりした文、ひとがみずから精神の中に据え付けた文、繰り返し語ったり、毎日の訓練によって記憶の中で反復したり、書いたり、アウレリウスがしていたように、自分のために覚書をしたりして精神の中に据え付けた文

⇒ ロゴスの物質的な備えを身につけることによってこそ、出来事とのよい格闘家、運命とのよき格闘家にとって必要な備えができる

➤ どんな言説＝談話でもいいわけではない→理性に基づいている命題であること

- ・ 理性的であると同時に真であり、行動の許容可能な原理を構成すること
 - ・ 物質的に存在するロゴスとは、言説的で合理的な要素を持つ文である
- ⇒ 真であることを語り、なすべきことを命令するような合理的な文のこと

➤ この言説は、説得的な言説

- ・ 真であることや、なすべきことを語るだけではない。
- ・ 確信だけではなく、行為そのものを導く、という意味で説得的：行為を引き起こす
- ・ あたかもこのロゴスそのものが、みずからの理性や自由や意志とひとつになって、その人の代わりに語っているかのよう。

⇒ なすべきことを命令するだけではなく、必要な合理性という様態において、なすべきことを実際におこなう

■ 存在様態の問題(p369, l15-)

- ・ 言説の物質的な諸要素が、必要な準備を実際に構成することができるためには、それが獲得されることが必要であるばかりでなく、いわば恒常的に現前していることが必要

→ パラスケウエーを構成するロゴスは助けてくれるものでなくてはならない：ボエートス(補助)

- 主体を危機に陥れるような出来事が起きたとき、このロゴスは要求があればすぐにでも応えなければならない
- 出来事が起きたときロゴスは語ります。パラスケウエーを構成するロゴスが発せられて、助けを予告。助けはすでにそこにあって、なすべきことを語ります／私たちがなすべきことを実際にさせてくれる

(よき操舵者、城塞、治療薬…)

- ・ ロゴスが役割を果たし、実際の助け、恒常的な助けになるためには、この理性的なロゴスという備えはつねに「手許に」prokheiron(ラテン語 ad manum)なくてはならない
 - 「記憶」
 - ムネーメー(記憶という語の古い形)
 - : 思想や、詩人が述べた文をその存在と価値と輝きにおいて保持する
- たんに、文を歌い直して光の中でつねに新たに、常に同じように輝かせるという形での記憶ではない
- 手許に持たなくてはならない;ほとんど筋肉の中に持たなくてはならない:活動する記憶、活動中の記憶
- ・ 歌は個人に組み込まれ、その行為を支配し、いわばその筋肉や神経の一部とならなくてはならない
- ・ だからこそアスケシスの準備として、こうした早期の訓練を前もってしておかなくてはならない
- ⇒ 出来事が起きたとき、行為の主体そのものがロゴスとなる
 - 歌ったり、口に出すことは必要ない
 - 行為の主体は、然るべきやり方で行為する
- 異なった形のムネーメー(言語的な再生とその活用のまったくことになった儀式であり、繰り返される言説と、そこで現れる行為の輝きのまったく異なった関係)

■ 内容の整理 (p372, l7-)

- 古代ギリシア・ローマ人にとって、アスケシスは、完全で独立した自己の自己への関係を構成するという最終的な目標のために、パラスケウエー(備え、装備)の構成を目標としていた。
- ・ パラスケウエーとは、
 - 真の言説が、理性的な行動の原型を構成するために取るべき形のこと
 - 真の言説の恒常的な変換構造であり、真の言説は主体の中に、道徳的な許容可能な行動原理の中に根付いている
 - ロゴスをエートス(習慣?)に変換する要素
- ・ アスケシスとは、
 - 個人がこのパラスケウエーを形成し、完全に定着させ、周期的に蘇らせ、必要があれば強化できるようにするための手続きの総体、その規則的に計算された連鎖のこと
 - <真実を語ること>を可能にしてくれるもの
 - <真実を語ること>は主体の存在様態として構成される

※ キリスト教において展開するアスケシスとは非常に異なったものの可能性

感想

「ちゃんと生きる」という話を想起した。「ちゃんと生きる」とは、「どうあるべき」とかそういう理屈に則って生きるというよりかは、大事な本質を理解し体現しつつける生き様のような印象を持つ。大事な本質とは、本人が腑におとしていて、納得して、そのまま行動原理となりえるようなもの、のような気がする。(「～であるべき」といった規範?に基づいて言動するというよりも、自然体で、反射的に“そのように”ふるまうことができる、といったかんじ。武道・格闘技の備えを通じて出来事と格闘可能になるという話はまさに身体

的なしかるべき反射を鍛える印象だが、ものの考え方や態度、発想、反応もまた同様に、当たり前のことのように、かくあるべきありようを体現できる、ということ…)アスケーシスとは、自分や自分の生きる世界において抜き差しならない大切な原理を見出し、そのように生きられるよう努力すること、のように思えた。少しばかり血肉になりかけている考え方もあるような気がしているが、生きること全般を支えるものにはまだまだなっていないような気がする。自己に配慮しなくては。

全然違うかもわからないが、先日「映像の世紀 バタフライエフェクト」で「昭和の文豪たち」というタイトルで放送があった。その中で三島由紀夫が取り上げられていたが、三島はある種、自らの信条に忠実で、行動や振る舞いに反映させようと真面目に努力してきた人なんだなという印象を持った。自死の背景には、世界との関係をとらむすべないと絶望したのがきっかけのように思え(三島が取り結ぼうとした世界…社会…自衛隊?の側は、アスケーシスとはかけ離れ、ロゴスを持たない、他者依存的な存在とみなされた?)、かつ、三島からしたら自分もたぶん絶望してしまうような生き方をしているのだろうな、とそう感じた。(という発想自体が他者依存的??)でも、それは、徹底的に崩壊されたガザを前に、「もう無理だ」とあきらめてしまうことと同じなのかもしれない。同番組中、司馬遼太郎は昭和を題材とした作品を書けなかったとされ、かつ、「何故日本人はこんなに馬鹿になったんだろう」という22歳当時の感想も紹介されていた。世界とのかかわりを取り結び続けられるように、視線も移動させながら、いかに自己に配慮しつつけられるかが問われている、ということだろうか。